

139

こんにちは、塾長の大井です。

「3期生受験戦記」第3回です。

AさんがTOPの生徒となり、彼女との日々が始まりました。本人は当時のことをこう述懐しています。

「私は、TOPができた時、『ああ、私はここに通うことになる』と直感したんです。体験授業を受ける前からそう思いました。それで授業が面白かったので、やっぱりここにすると決めました。」

Aさんはやはり個性的なおもしろい子で、体験授業で示した通り、度々とても優れた説明をして私たちを感心させました。そこには、年齢に似合わないほどの流麗な流れがあり、独自の言葉がありました。

ただ入会当初のAさんは、決して難関中合格を目指していたわけではありませんでした。これは最近本人から聞いたのですが、中学受験するかどうかすら確定ではなく、苦手な算数で学校でついていくための塾を探していたとのことでした。

しばらくして、その算数で彼女の最初の課題が浮き彫りになってきま

した。基本問題はいいのですが、あるレベルを超えると、途端に思考にブレーキがかかり、誤読や自滅でのミスを頻発するのです。これには、理系担当の田宮も、

「国語の授業を見ている限り、あんな変な読み違いは絶対するわけないんだけどなあ……。苦手だ、できない。とすごく思いこんでるんだよなあ……。」そう言ってよく頭を悩ませていました。

自己暗示—中学受験におけるこの力はとても大きく子どもたちの学習に左右します。元々、子どもは大人よりも感性が柔らかい分、思いこんだ時の作用は、大人よりずっと大きくなります。

だからこそ私たちは、子どもたちに、「こうやればできる。君ならできる。」そういうプラスの自己暗示をかけられるよう、励まし、向き合わせ、成功体験へと誘う必要があるのです。

そして、そのプラスの自己暗示は、やがて小さな自信になり、ささやかな自負を生み、時間をかけて揺るがない誇りへと成長していきます。

できない、ムリだ。

子どもがそう思うのは仕方ありません。人には適性もペースもあるからです。でも、そんな時、「**今は**な。だけど、もがけばいつか必ずでき

るようになるから。」

そう励まし、術を与えることこそが私たちの大きな役割なのだと思います。

私たちはAさんにずっとそう言い続けました。

受かるまでずっと。

(次回につづく)

2017年2月27日

大井雄之